美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2018 January/February

TAKE FREE

NO.45

特集

西郷さんと庄内

庄内憧憬

西郷 隆夫

Cradle 1

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2018 January/February

平成30年1月1日発行（偶月奇数月発行）第8巻3号（通巻45号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-69-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／摩耶山と荒沢ダム湖

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

時代を生きぬく西郷さんの人間力

西郷 隆夫

西郷さんや庄内の方々が当時、何を信じ、何を恐れ、何を大切にしたのか。『南洲翁遺訓』から学び、伝えていきたい。

初めて庄内の地にまいりました。先ほど菅さんのお宅で庄内柿をいただいて、なんだか150年くらい前にタイムスリップしたような気がしています。感無量です。私は西郷隆盛のひ孫にあたりますが、物心ついた時から父親は西郷さんの話を聞かせてくれました。その中でずっと言っていたのが、ここ庄内のことです。菅さんのこと、酒井さんのこと、そして『『南洲翁遺訓』が編まれた地へ足を向けて寝るな』ということ。

日本に偉人や武将は多くいますが、いつの時代も誰からも「さん」づけで呼ばれているのは、西郷隆盛その人だけです。それはなぜなのか。きっと西郷さんの「人間力」にあるのかもしれません。西郷さんには「知行合一」という思想哲学がありました。「知ることは行いせずば知らぬと同義」知ったことは行動に移しなさいという意味です。彼のすごさは「許す」という行動でした。戊辰の役、庄内藩への処置を寛容に「許した」その心の内は、強い者には強く、弱い者には弱く、割れた茶碗をもとに戻すのではなく新しい茶碗を買い、新しい人生をまっとうせよというものです。この考え方は彼の心の大きさに等しいものでしたが、西郷さんは許す相手をしっかりと見定めていました。そのことがよく分かる逸話に、西郷さんの人脈の話があります。西郷さんはどれほどの身分になっても、待つばかりでなく、常に自分から会いに行って人脈を築きました。戦略を考える時にも、「何をするか」より、「誰と組むか」を第一に考えたといいます。大久保利通が〝何をするか〟を大切にした一方で、西郷さんは人を大事にした。ただ今のような時代になってみると、西郷さんと大久保さんのような方が二つで一つになればこそ、という気もしています。

さて、心の時代といわれてどのくらいたつでしょうか。こういう時代だからこそ、庄内の方々が汗水流してまとめた『南洲翁遺訓』を、政治家や経営者だけでなく、子どもたちも含む全員が読めば、日本人としての誇りを持てるのではと思っています。西郷さんや庄内の方々が当時、何を信じ、何を恐れ、何を大切にしたのか。明治維新150年の節目だけではなく、遺訓から常に学び、伝えていくことが私たちの役目と考えています。最後に、西郷さんのしゃべり言葉で「敬天愛人」をお伝えします。

道は天地自然の物にして
人はこれを行うものなれば
天を敬するを目的とす——

本日はありがとうございました。

※本文は、2017年11月23日に鶴岡市で開催された「西郷隆盛と「徳の交わり」シンポジウム」の基調講演「西郷隆盛を語る」を抄録し、編集部がまとめた内容です

さいごう・たかお／株式会社ナンシュウ代表取締役。1964年生まれ。1987年、株式会社大丸松坂屋百貨店入社、食品部長などを歴任。2009年、鹿児島の唐芋菓子専門店、有限会社フェスティバロ入社。2015年4月、曾祖父・隆盛の「敬天愛人」の志を継ぎ、「西郷隆盛銅像展望ホール・K10カフェ」オープン。同11月、株式会社ナンシュウ代表就任。西郷隆盛にまつわる歴史を語る活動にも力を入れ、講演活動、メディア出演など多数。

西郷隆盛真筆の掛け軸の前に座る西郷隆夫氏と、菅家当主 菅秀二氏（鶴岡市 菅家邸宅にて、2017年11月23日撮影）

菅実秀が明治4年に庄内藩主酒井家から拝領した屋敷と庭園。現在は菅家の子孫が居住し、庭園を一般公開している。座敷の床の間には、明治8年に鹿児島で西郷さんから贈られた漢詩「送菅先生」が掛けられている。西郷さんはこの1年4カ月後に西南戦争で没した。

〈大意〉逢えたかと思えばまた別れなければならぬ。あたかも飛び来たり飛び去る雲の如く。逢って欣んだのもつかの間、また別れの悲しみが待っている。自分が廟堂にあった時、あなたに約束したことも空しくなってしまい、然諾を重んじた季布（漢・高祖の名臣）に恥ずるものがあるが夜も昼も思い慕うて君を忘れるものではない。

昭和44年から兄弟都市として交流を続けている鶴岡市と鹿児島市。
旧庄内藩主・酒井忠篤公が発起人の一人となった上野の森の「西郷さん」銅像。
鶴岡市羽黒町松ヶ岡のほぼすべての家庭に飾られている西郷さんの肖像画。
本州で唯一酒田に存在する、西郷さんを祀る南洲神社。
そして、庄内で編まれた、西郷隆盛の教えを伝える唯一の書物といわれる『南洲翁遺訓』。
なぜこれほどまでに庄内は西郷さんとつながりがあるのか。その軌跡を追ってみました。

西郷さんと庄内

特集

《主な参考資料》
赤沢源彌著『臥牛先生行状』1924年、犬塚又太郎著『庄内と大西郷』致道博物館・1964年、加藤省一郎著『臥牛 菅實秀』致道博物館・1966年
地主正範著『死に代えた『南洲翁遺訓』』2005年、『南洲翁遺訓 全』（致道館本縮刷版）荘内南洲会・1975年、荘内南洲会編『南洲翁遺訓』荘内南洲会・1997年
長谷川信夫著『西郷先生と荘内』荘内南洲会・1998年、小野寺時雄著『南洲翁遺訓に学ぶ』荘内南洲会・2007年
鶴岡市史編纂会編『図説 鶴岡のあゆみ』鶴岡市・2011年、鹿児島市教育委員会『徳の交わり～西郷隆盛と菅実秀 魂のふれあい～』2014年

西郷さんと庄内藩

Saigosan & Shonaihan

西郷隆盛と庄内藩が親交を始めたのは明治初期。その当時のことを、旧庄内藩主酒井家18代当主・酒井忠久さんに伺いました。

西郷隆盛（1828-1877）
庄内士族の石川静正による肖像画をもとに、黒田清輝の門弟・佐藤均が描いた肖像画。致道博物館蔵。

「江戸末期、会津藩は京都で、庄内藩は江戸で市中取締役を務め、庄内藩は江戸薩摩藩邸を焼き打ちしました。鳥羽伏見の戦の後、徳川将軍が降伏したので庄内藩は恭順を表したのですが、西軍（官軍）は許さず、戦わざるをえなくなったのです」。

慶応4（1868）年4月、庄内藩は清川口で官軍に奇襲攻撃を受けましたが、1日で撤退させます。これが東北の戊辰戦争の始まりでした。その後、庄内藩は連勝を続けますが、他藩が相次いで降伏する中、9月26日、ついに参謀の黒田清隆に降伏の意を伝えます。黒田率いる官軍はその日のうちに鶴ヶ岡城下へ。その晩、藩主酒井忠篤公が正式に降伏し、東北の戊辰戦争が幕を閉じました。

「当時、会津藩をはじめ他藩では、戦火などによって悲惨な状況になっていました。でも庄内藩の降伏に対する処置は、城の明け渡しと兵器弾薬の没収のみ。そしてわずか2日で1万人を超える官軍を庄内から引き揚げさせたのです。それだけでなく、言い渡しを終えると、黒田は下座にまわり、忠篤公に対し、礼を以て遇しました。こうした道義にかなった立派な姿に庄内の人々は驚き、感銘を受けたわけです」。

明治2（1869）年、庄内藩の菅実秀が東京の黒田清隆を伺い、戦後処置について御礼を述べたところ、それらはすべて同じ日に鶴ヶ岡城下に入っていた西郷さんの指示だったと告げられます。さらに、黒田たち参謀部の幹部が庄内藩への寛大すぎる処置に反対すると、西郷さんは「敵となり味方となるも一に運命によるもので、いま荘内藩が順逆を覚って帰順した以上は、もう兄弟も同然ではないか」（加藤省一郎『臥牛菅實秀』）と語ったということも。

「この時に、実秀はこれからの時代の指導を仰ぐのは、西郷さんしかいないと確信したわけです。それを受けて忠篤公は翌年8月、鹿児島にいる西郷さんのもとへ庄内藩の使者を送りました。これが庄内と鹿児島の交流の始まりです」。

同年閏10月には忠篤公自らが70余名の旧藩士と一緒に鹿児島へ。その後も両者の交流は鹿児島や東京を舞台に明治10年の西南戦争まで続き、その間、庄内は西郷さんの指導のもと、松ヶ岡の開墾事業を進めるなど近代化の礎を築きました。また忠篤公と弟の忠宝公は西郷さんの勧めでドイツ留学へ。帰国後、中央政府での活躍を期待されてのことでした。

「しかし忠篤公が帰国した頃はすでに西郷さんが亡くなっていて、中央政府は大きく様変わりしていたんです。それなら自分の力を地元の産業振興に注ごう。そう考えて忠篤公は庄内に生きることを決断したんだと思います」。

以後、酒井家は140年近くにわたって地域の発展に尽力。忠久さんも致道博物館館長として、庄内の歴史文化の伝承に力を注いできました。

「私が今ここにいられるのは西郷さんのおかげです。その意味でも私は、これからも西郷さんをしっかり顕彰していかなければと思います」。

戊辰戦争降伏の儀が行われた藩校致道館。

「汚名をそそいで国に報いる」と、松ヶ岡の開墾事業に旧庄内藩士3千人が従事した。致道博物館蔵。

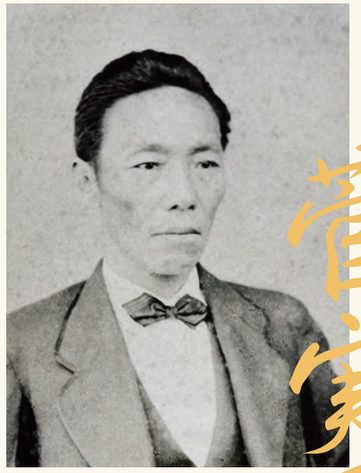
庄内藩主酒井家13・15代・酒井忠篤（1853-1915）
戊辰戦争降伏時はまだ16歳だった。致道博物館蔵。

「戊辰戦争絵巻」より清川口の戦い。立谷沢川と最上川の合流点で、庄内藩と官軍による激しい戦いが行われた。致道博物館蔵。

西郷さんと菅実秀

西郷さんと菅実秀が初めて顔を会わせたのは明治4年4月。以後2人は後に「徳の交わり」と言われる親交を重ねていきました。

Saigosan & Sugesan



旧庄内藩中老・菅実秀（1830-1903）
この写真はちょうど西郷さんと初めて会った頃のもの。菅家所蔵。

――一見して果して此の人なりと、交情、日々に厚く、夫子（実秀）の翁（西郷）を敬する兄の如く、翁の夫子を親しむ弟の如し――

『臥牛菅實秀』より

右は、明治4年4月、東京で西郷さんと菅実秀が初めて会った時の様子を、同席者が記した一節です。実秀が、庄内藩への寛大な戦後処置の背景に西郷さんがいたと知ってから、2年3カ月の月日がたっていました。以来始まった2人の親交について、実秀の玄孫、菅秀二さんに伺いました。「この時、実秀は熱烈に今後の進むべき国の道を問い、西郷さんはそれに答え、論じ合いました。実秀は徳を持って人民を治めるという徳治国家を理想としていたため、西郷さんの徳を重視する政治論・文明論と合致したんでしょうの。以来2人は肝胆相照らす仲となったのです」。

当時、東京で2人を中心とした庄内と鹿児島の人々の交流を深める場となったのは、向島にあった庄内藩の御用商人・越後屋喜左衛門の別邸でした。西郷さんが漢詩「幾たびか辛酸を」を書いて筆を置き、「西郷がもしこの詩と違ったことをしたら、言行相反したる男だと、それきり見限ってほしい」（小野寺時雄『南洲翁遺訓に学ぶ』）と話したのも、この屋敷での懇親会の席でした。同年9月末、実秀が県の権大参事に任命されて庄内に戻る際には、ここで西郷さんが実秀の送別会を主催。別れを惜しむ漢詩が贈られました。その後、再会を果たしたのは、実秀ら8名が庄内から鹿児島を訪れた明治8年。思いがけない訪問に西郷さんはことのほか喜んだといいます。「私の解釈では、菅実秀という人物は、西郷さんの勲功実績や名声などに目を奪われず、西郷その人の真髄に迫り、そこに打ち込んだ数少ない一人だったと思います。だから明治10年の西南戦争の時もこの戦は西郷さんの本意ではないと見抜き、奮い立つ庄内の人々を抑えたのです。ただ、西郷さん戦死の知らせを受けた後はよほどショックだったのか1年くらい人と会わず、喪に服したようです」。

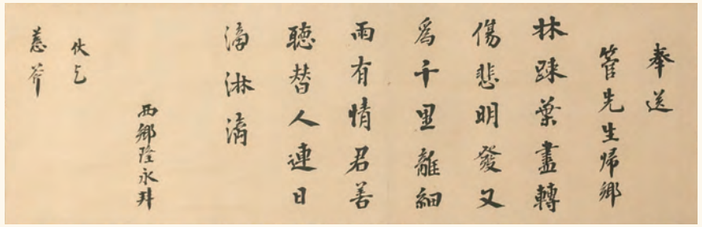
その後、実秀たちは輸出用の絹織物産業を興し、第六十七銀行を設立し、庄内米の改良と価格の安定化に向けて酒田米商会所を設立するなど、庄内の産業振興に尽力。一方で政府の厳しい監視のもとそれぞれが西郷さんの教えをひっそりと語り継ぎました。そして明治22年、大日本帝国憲法発布と同時に西郷さんの賊名が解かれると、実秀は「今こそ西郷の真の精神を世に明かすべき時である」と赤沢経言（源也）と三矢正元（藤太郎）に『南洲翁遺訓』の編纂を指示。翌年、序文を副島種臣に依頼して本が完成すると、酒井忠篤公が1000部を出版し、旧藩士6名が背負い、北は北海道から南は鹿児島まで歩いて配りました。こうして明治4年から始まった実秀と西郷さんの「徳の交わり」は、『南洲翁遺訓』を生み出し、西郷さんの真の姿を後世に広く伝えることに結びついていったのです。

平成13年、酒田の南洲神社に建立された西郷さんと菅実秀の「徳の交わり」銅像。

明治4年、東京で西郷さんから贈られた漢詩「幾暦」。「児孫の為に美田を買わず」の有名な一節も。写真提供：致道博物館

明治22年に『南洲翁遺訓』の編纂が行われた菅家の座敷。西郷さんと酒井忠篤公の真筆が掛けられている。

『南洲翁遺訓』（第二版）。明治23年に全国に配り歩いたもの。序文は副島種臣。菅家所蔵。



明治4年9月、菅実秀が庄内に帰る際、西郷さんから受け取った漢詩「奉送菅先生帰郷」。菅家所蔵。

荘内南洲会

『南洲翁遺訓』を基に西郷さんと庄内の先人の真の精神を語り継ぐ人たちがいます。その尊い思いに導かれて「徳の交わり」坐像の建つ酒田市の「南洲神社」を訪ねました。

菅実秀を中心とした旧庄内藩士が、西郷さんから学んだ教えを『南洲翁遺訓』として編纂（へんさん）し、全国を行脚し弘布してから約130年がたちます。以来、西郷さんの精神を学ぶ心は、人から人へ、時代を超えて伝えられてきました。近年、そうした庄内の人々の心のよりどころとなってきたのが、昭和51年に酒田市飯森山の麓に創建された「南洲神社」と「南洲会館」です。

西郷さんの雅号の「南洲」を冠した南洲神社は、全国に5社あります。鹿児島市、都城市、奄美大島、沖永良部島、そして九州地方以外で唯一がここ庄内、酒田です。酒田の神社は、鹿児島市の南洲神社より分祀された西郷さんの御霊と、菅実秀の御霊を合祀、境内には「徳の交わり」の対面坐像が建立されています。また、隣接する南洲会館の講堂では、幕末からの書家展（掛け軸展）といった資料展示を行っているほか、毎月第2土曜日には「人間学講座」を開講しています。

これらの運営にあたっているのは、公益財団法人荘内南洲会の皆さんです。4代目理事長の水野貞吉さんにお話を伺いました。「西郷先生と菅先生の遺徳をしのび、不易の教訓『敬天愛人』の精神を後世に伝えるため、荘内南洲会は発足しました」。会の設立は昭和50年。2代目理事長の長谷川信夫氏は、旧制中学校2年生の時に『南洲翁遺訓』に出会い、西郷さんの偉大な精神にふれようと『南洲翁遺訓』の講究を深め、晩年まで300回を超える講座を開催しました。また、神社の参拝者や、西郷さんの遺訓に学びたいという人たちに『西郷南洲遺訓』という岩波書店の文庫本を自費で購入し、無償で配布。配った数は約3万冊といわれています。長谷川氏は西郷さんの沖永良部島への流謫時代の遺品や遺墨も多く収集し、それらの史料は現在、南洲会館の資料室に所蔵、一般公開しています。

初代理事長の菅原兵治氏は、荘内南洲会の活動に3つの願いを掲げました。一つは西郷先生の大徳を顕揚すること。二つに『南洲翁遺訓』を講究し多くの人に広めること。そして、地域づくり人づくりに貢献すること。その遺志を継いだ長谷川氏が毎月の「南洲翁遺訓講究会」を始め、3代目理事長の小野寺時雄氏は『南洲翁遺訓に学ぶ』という解説付きの書籍を出版しました。この講究会と書籍を活用した「人間学講座」は、西郷さんたち激動の時代を生きた人々と現代の私たちとを一つの道でつないでいます。水野さんはその学びが導く先をこう話します。「徳の交わりは、心の交わりであり、道の交わりです。『敬天愛人』は、天を敬い、人を愛すると書きます。天とは何か、愛とはどういうことか、突き詰めていくともっと広がっていく。そうして自分の道も広がる。長谷川先生をはじめ先人たちが語り継いだその道を、私たちも精進していきたいですね」。

荘内南洲会2代目理事長の長谷川信夫さん。生涯を『南洲翁遺訓』の講究に努めた。南洲会館には長谷川記念館を内設。
写真提供：荘内南洲会

拝殿は、伊勢神宮の式年遷宮より下賜された総ヒノキ造り。

2

2

4

3

1

1　南洲会館では西郷さんの真筆を4点収蔵展示。自作の漢詩も含まれる。明治4～8年筆。
2　江戸城明け渡しの際、薩摩藩邸で勝海舟との会談時に使用した鉄扇。表面には日の出と白波、裏面には三日月とすすきが描かれている。東征にも持参したとされる。
3　鳥羽伏見の戦功によって西郷さんが朝廷より頂戴したとされる西陣織の紙入れと煙草入れ。
4　長州藩士の三吉慎蔵が西郷さんと坂本龍馬、小松帯刀、桂久武の4人に贈ったという赤間関（あかまがせき／現在の下関市）の硯。唯一現存する一つ。

いずれも荘内南洲会所蔵

酒田市飯森山「南洲神社」。境内には「徳の交わり」対話の坐像と拝殿がある。
写真提供：荘内南洲会

『南洲翁遺訓』に読む 敬天愛人の心

公益財団法人 荘内南洲会
理事長 水野 貞吉

『南洲翁遺訓』は序文、遺訓43章、跋文からなり、その内容は、政治、経済、外交、人としての道など多岐にわたる。その中から、私が日常心がけている章、西郷先生の精神「敬天愛人」に係る章を列記する。なお、意訳、講究は、小野寺時雄前理事長の著作『南洲翁遺訓に学ぶ』から引用させていただいた。

己れに克つ（第22章）

〈原文〉
己れに克つに、事事物物時に臨みて克つ様にては克ち得られぬなり。兼て気象を以て克ち居れよと也。

〈意訳〉
その時やその場に臨んで、自分に克とうとするのでは、なかなか克てないものである。前々から堅い信念をもって己に克つことを固く鍛えておくことが大事である。

学に志す者（第23章）

〈原文〉
学に志す者、（中略）規模を宏大にして己れに克ち、男子は人を容れ、人に容れられては済まぬものと思えよと、古語を書て授けらる。（中略）古人を期するの意を請問せしに、堯舜を以て手本とし、孔夫子を教師とせよとぞ。

〈意訳〉
学問を志す者は、理想を宏大にし、常に自分の我に克つよう修養することが大事である。他人を自分の心の中に受け入れる包容力がなければならない。逆に他人の包容力に甘えるようであってはならない。

古聖人にどう学ぶべきかは「堯舜を手本とし、孔子を教師とせよ」と。

道は天地自然の物（第24章）

〈原文〉
道は天地自然の物にして、人は之れを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心を以て人を愛する也。

〈意訳〉
道というものは天地自然のものであって、人はただそれを行うものである。したがって人の道は天を敬うことを目的とすべきである。天は他人も自分も同様に平等に愛してくれるものであるから、自分を愛する心を以てすべての人を愛することが人の道である。

毎月の「人間学講座」では『南洲翁遺訓を学ぶ』を音読。

天を相手にせよ（第25章）

〈原文〉
人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬ可し。

〈意訳〉
道を行う者はどんなことでも人を相手にするのでなく、常に天を相手にするよう心がけるべきである。天を相手にして自分の最善を尽くし、たとえ世に認められなくとも、人を咎めてはならない。すべて自分の誠意が足りなかったことを反省すべきである。

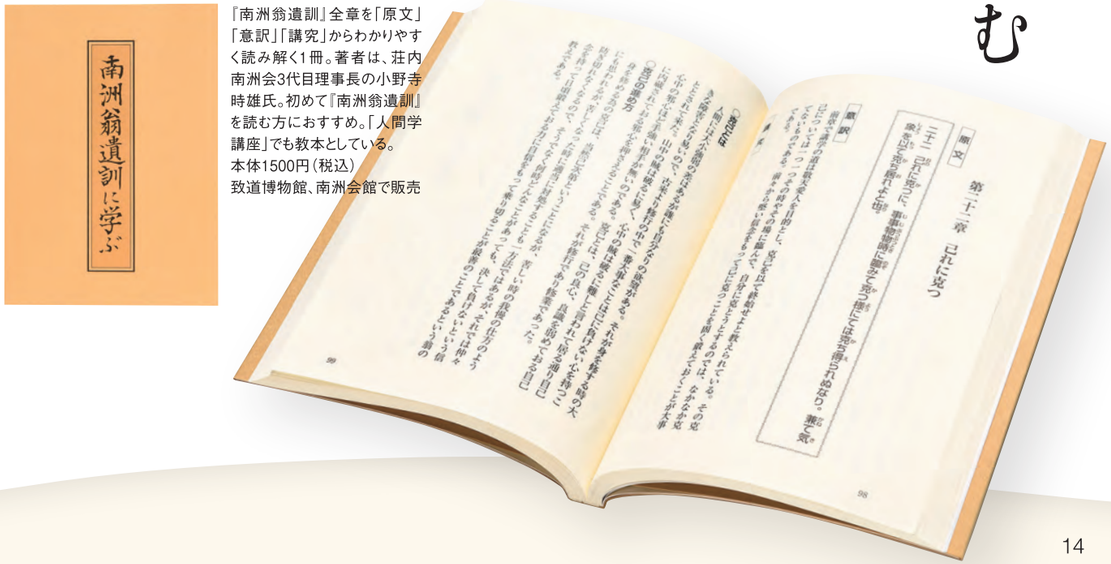
荘内南洲会の「人間学講座」では、『南洲翁遺訓』を受講者全員で声を出して読んでいる。何回読んでも、これで解った、これで良しということはない。荘内南洲会の初代理事長、菅原兵治先生は「先人の心を以て心読すること……百読し、千読し、万読するあらば、必ずやその中から、人々おのずからにそれを内視し、自得して、開運の力を得るであろうから」と言われた。『南洲翁遺訓』を学び、自分のあり方を考え、良い人づくり、良い地域社会づくりをすることが、私たちが受け継いだ使命と考えている。

ご案内

荘内南洲会では、南洲会館の講堂で毎月第2土曜日「人間学講座」を開催しています。どなたでも受講できますので、ぜひご参加ください。お申し込みは不要です。

［次回開催日］
1月13日（土）14:00〜16:00
2月10日（土）14:00〜16:00
［お問い合わせ］
荘内南洲会 ☎0234-31-2364
酒田市飯森山2-304-10
開／9:00〜16:00
休／日曜、月曜日
￥／入館無料（人間学講座の参加費も無料です）

天を敬い人を愛する――。西郷さんは沖永良部での苦しい生活でこの精神に到達したとされる。致道博物館寄託。



『南洲翁遺訓』全章を「原文」「意訳」「講究」からわかりやすく読み解く1冊。著者は、荘内南洲会3代目理事長の小野寺時雄氏。初めて『南洲翁遺訓』を読む方におすすめ。「人間学講座」でも教本としている。
本体1500円（税込）
致道博物館、南洲会館で販売

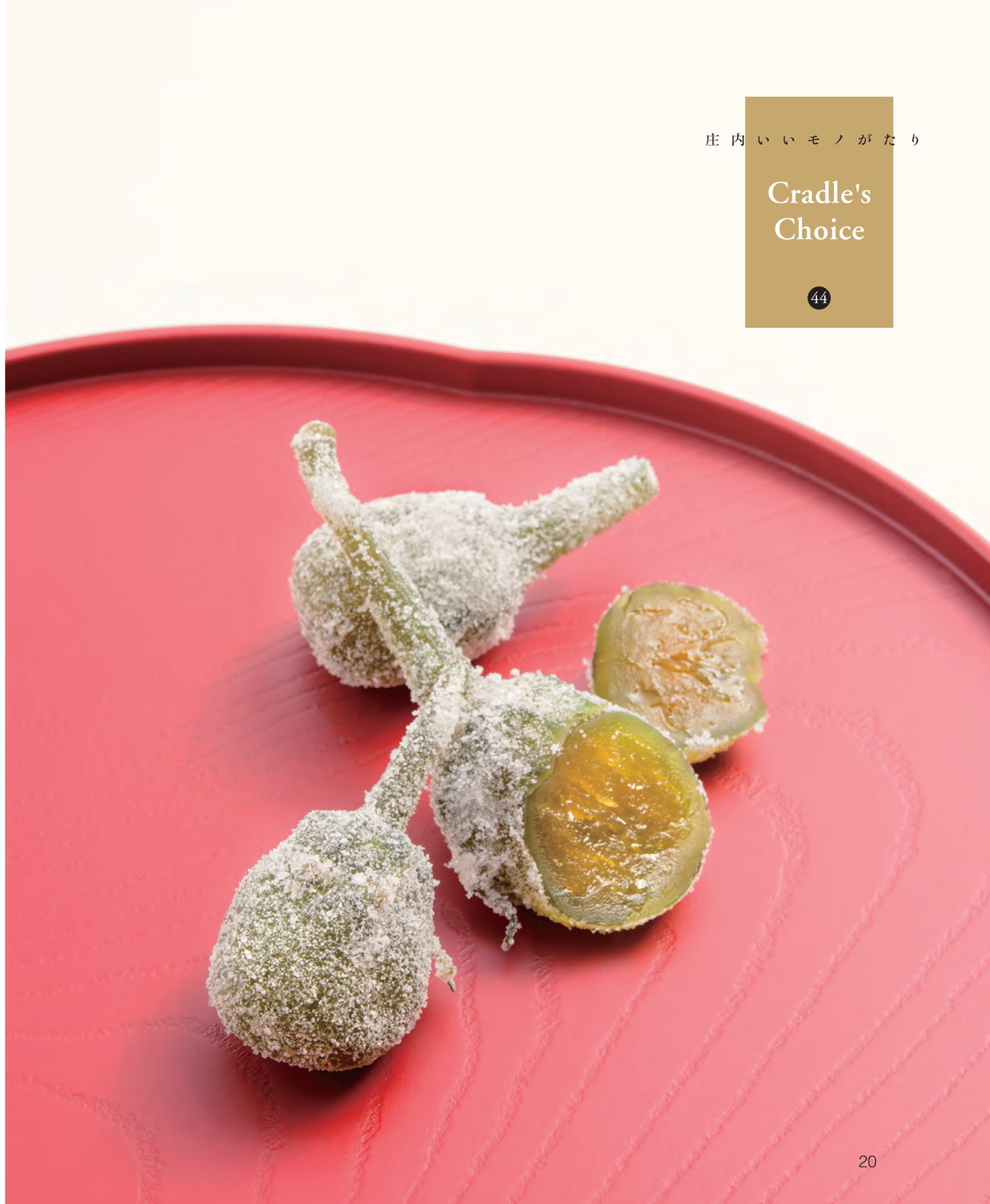
庄内写真季行 32 金峯山山頂

白銀のテラスを思わせる山頂を舞台に、動物たちはどんな暮らしを送っているのだろう。

冬晴。居ても立ってもいられず、午後から旧道を登ると、山頂に着いた頃には日が傾いてきた。積雪のおかげで山頂の広場は夏よりも展望がきく。足下には庄内平野と鶴岡市街が広がっている。まるで白銀の「テラス」だ。

さて雪中の足跡たちは、右がヒメネズミ、それを追いかけているのがテンだろうか。絵本の世界なら、ここを舞台に動物たちが人間や森のウワサ話で盛り上がるのだろう。山頂のテラスでひとり、そんな想いにふけていた。

写真・文＝八尾坂 弘喜



大松屋本家 大松庵の初なすび

ヘタも含めて
丸ごと味わえる茄子の砂糖漬け
発売から60年近く経った今でも
その発想と味わいに、脱帽！

めずらしや山をいで羽の初茄子（はつなすび）

松尾芭蕉が「おくのほそ道」で鶴岡城下の長山邸に滞在した際、食膳に出された民田（みんでん）なすを見て詠んだ句である。「初なすび」はこの民田なすを砂糖漬けにしためずらしい菓子だ。

考案したのは、長山邸跡地にほど近い日吉町の大松屋本家4代目、漆山正行氏。同店は創業以来、和菓子やパンなどを作る菓子屋だった。しかし昭和30年代に入り、大量生産・大量消費の時代となると、4代目はそれまで作っていた菓子を止め、地域の「土」から「産」まれる材料を使った新たな鶴岡の土産品を考えるようになった。そして着眼したのが、鶴岡市民田地区の在来種として古くから食べられ、芭蕉が句にした民田なすであった。その後、試行錯誤を経て商品化に成功した4代目は、製造方法を門外不出とし、大松屋本家の専売特許として販売。現在は、鶴岡市水沢でそば処大松庵（だいしょうあん）を営む5代目永吉氏に受け継がれている。

通常は塩漬けや粕漬け、辛子漬けなどの漬物として食べられる民田なす。そのころりと小さな「初なすび」を一口かめば、厚めの皮の中はゼリー状になっていて、ふんわりと茄子の風味が広がった後、上品な甘さの中に果肉の食感が楽しめる。茶菓子として、全国各地の茶人に愛されているのも納得の妙味だ。ところで茄子といえば夏が旬だが、初なすびは暮れから春にかけての季節販売で、特に正月に好まれるという。どうも「一富士二鷹三茄子」や「初夢に茄子」といった昔からの諺（ことわざ）に、その由来があるらしい。どれ、平成30年の戌年は、初なすびを食べて縁起担ぎといってみるか。

初なすびの販売は毎年11月から。品切れになり次第終了です。取り扱い先は、庄内では大松屋本家（鶴岡市日吉町）、庄内観光物産館、清川屋各店。県外では三越や高島屋などで販売しています。製造販売元の大松庵では店頭販売や全国発送も。種類はバラ、5個入り袋、9個前後紙箱入り、15個前後入り紙箱の4種類。贈答用には銘木箱入り（小箱・中箱）もあります。
大松庵 ☎0235-35-4041

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行 11

息白く 本間家旧本邸を歩く

季語 息白し（いきしろし）
寒さで吐く息が白いさま。

雪催（ゆきもよ）いの日が多くなると
眩しい朝日と青空に
冠雪した鳥海山が勇姿を現す日には
心を踊らせ、どこかへ出かけたくなる。
庄内平野の冬の風物詩でもある
防雪柵を横目に、車を走らせた。

臥龍の松

かつての豪商が軒を連ねていた酒田の街に、今もその面影を色濃く残すのが、「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と「酒田節」に歌われ、日本一の大地主として名を知られた酒田の本間家である。本間家旧本邸は1768（明和5）年、三代光丘が幕府巡見使一行の本陣宿として、庄内藩主・酒井家に献上したもので、その後拝領し、本間家では昭和20年春まで邸宅とした。

煤払ひせよ床の間も奥の間も

―鷹羽狩行

建物は、旗本2千石格の長屋門を構えた書院造りの武家屋敷と、商家造りが一体となった全国でも珍しい建築様式である。庭門をくぐると、左手に石が積まれているが、旧来の石組の様式で「みだれ積み」といい、造作ないように見えて、自然の造形を巧みに表現したものである。庭園には他に全国の銘石がさりげなく多数配されているが、これは酒田湊の交易によってもたらされた。米を積んだ北前船の船底の安定を保つために石を用い、帰り荷として運んだことによる。さまざまな形や色の石に、当時の北前船の繁栄を見た。

「みだれ積み」の石

底冷の底に海神石を据う

―水内慶太

樹齢400年の「臥龍（がりゅう）の松」が覆い被さる表玄関から中に入ると、武家屋敷の天井は高く、四方柾（しはうまさ）と呼ばれる柱や、檜や楓に春慶塗を施した欄間と梁、杵をモチーフにした杵欄間（きねらんま）や筬欄間（おさらんま）など、随所に当時の最高の技巧を見る。また、酒田は昔から火災が多かったため、逆卍の華頭窓（かとうまど）や川を模した畳縁、橋の欄干に例えた欄間、銅板が貼られた軒下など、火伏（ひぶせ）のまじないが至るところに取り入れられている。

筬欄間

華頭窓

伊予や佐渡のさまざまな色の庭石

火伏札一隅に張り年用意

―角川春樹

一方、住まいとしていた商家造りは趣が異なる。木材は杉などを使い、当主の書斎はわずか5畳。素朴ながらも、無双（むそう）窓や天井にはかわり竿、柱は杉の四方征などのこだわりも見られる。光丘は庄内砂丘の防砂・防風林事業をはじめ、中興の祖として多くの事業を手がけた。質素倹約を旨とし、世のために尽くそうとした当主の想いに時を重ねた。

手漉き硝子に小春日の屈折す

―あべ小萩

2018年に築250年となる本間家旧本邸。3月には「本間家のお雛さま」として、古今雛や百歳雛などが飾られ、また新しい季節を迎える。

底冷えのする武家造りの座敷に佇むと、手漉きの硝子を透かし、小春日の陽光が優しく差しこんできた。

◆本間家旧本邸（酒田市二番町12-13 ※冬期1月26日まで閉館）
写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）